

散歩道（材木座界隈）

（この小冊子は「鎌倉の散歩道（10）」で紹介した大町 材木座への道の途中にある神社仏閣、旧跡に関するエピソードを鎌倉シニア通信編集部（担当：乱れ橋）がまとめました。）

参考にするホームページ：

観光協会案内：<http://www.kcn-net.org/kamakura/tizutop.html>

散策順路

1. 本覚寺：刀工正宗の墓

鎌倉時代末期刀工、諸国を歩いて修行した後相州伝を完成した。佐助ヶ谷の入口付近に屋敷があり、正宗がその水で刀を鍛えた正宗ノ井戸があった。

2. 小町大路

「小町大路は材木座・乱橋を経て大町大路と交差し、小町を経て鶴岡八幡宮の東の鳥居の前に出るもので、その鳥居前が筋違橋で六浦に接続するものである」：鎌倉市史（総説編）

3. 夷堂橋（鎌倉十橋の一）

「夷堂橋は、小町と大町との境にあり、座禅川の下流なり。昔はこの辺に夷三郎社ありしとなり。今はなし。」：新編鎌倉志

4. 常栄寺（ぼたもち寺）

「源 頼朝が由比ガ浜を望むために当地に棧敷を設けた旧跡。日蓮が龍ノ口法難の際に、この寺の尼がぼた餅を捧げたことから（ぼたもち寺）と言われている」：新編相模国風土記稿

5. 逆川橋（鎌倉十橋の一）

「大町と辻町との間に橋あり。鎌倉十橋の一なり」：新編鎌倉志

6. 辻薬師堂（十二神将像）

「辻薬師は、逆川の南、辻町の東頬（ひがしつら = 東側のこと）にあり、

十二神あり」：新編鎌倉志

7. 元八幡宮

「源 頼義が奥州に出陣の時、ひそかに岩清水八幡宮をこの地に移した。その後八幡太郎義家が修復した。頼朝が鎌倉に入るや早速にも参拝し、その5日後にこの地より現在の八幡宮のある地に移しました。」：吾妻鏡

8. 妙長寺（泉鏡花が下宿して「星明り」を著述す）

明治の文豪泉鏡花は明治24年夏2ヶ月間妙長寺に滞在し、その後10月に尾崎紅葉の門下となる。明治31年に小説「みだれ橋」（後に「星明り」と改題す。）を書いた。

「雨戸の中には相州鎌倉の妙長寺という、法華宗の寺の本堂に隣した八畳の横に長い置床のついた座敷で云々。門を出ると左右に2畝ばかりの慰めに植えた青田があった。……一昨日の晩宵の口にその松野うらおもてに、ちらちら灯が見えていたのを海浜の別荘の花火を焚くのだといひ、否、狐火だともいった。」

9. 乱橋（鎌倉十橋の一、吾妻鏡に記録あり）

吾妻鏡の宝治二年(1248)六月十八日の条に「濫橋の辺にて一町程（約100米）南に雪が降り、あたかもあたり一面に霜が降りた様である」と記録されている。この様に、鎌倉時代から乱橋の名称は正式の公文書に使用されていた。鎌倉十橋のうちにて、吾妻鏡に見られるのは「筋違橋」「濫橋」の二橋のみである。

10. 五所神社（庚申塔鎌倉シニア通信 庚申塔めぐり（25）五所神社）

乱れ橋材木座村の合併に関連し明治41年（1908）7月に乱れ橋村の三島神社のある土地に両村の5神社を合わせて祀り五所神社とした。庚申塔も同時にここに集められた。

11. 実相寺（工藤祐経屋敷跡）

「開山は日昭上人と述べられている。日昭は工藤祐経の娘の子、寺の土地は元工藤祐経の屋敷跡と言われている。」：新編相模国風土記

12. 補陀洛寺

「補陀洛寺は、材木座の東、民家の間にあり。古義の真言宗にて、開山は文覚上人なり。勧進帳の切たるあり。首尾破れて、作者も年号も不知。其

中に文覚、鎌倉に下向の時、頼朝卿比來の恩を報ぜんとして、この寺を建てられしとし云々。」：新編鎌倉志

平家の赤旗：幅2布、長3尺5分あり、赤布に九万八千軍神と書付あり。寺僧によれば、昔はもっと大きかったが厄病が流行った時に人々はこの切れ端を煎じて飲めば病にかからぬとちぎった為に小さくなった。その他、頼朝の木造、文覚上人の木造あり。

梵鐘の事「鐘楼跡、今跡のみ有りて鐘もなし。当寺の鐘は、松岡東慶寺にあり、農民、松岡の地にて掘り出したりと云う。銘を見れば、当寺の鐘なり。兵乱の時、紛散したるなるべし云々」：新編鎌倉志

十二神将像とキヨソネの事。

13. 光明寺

今回は省略

14. 六角井（鎌倉十井の一）

矢根の井とも云う、鎌倉十井の一なり。「飯島の南に六角ノ井と云う名水あり。鎌倉十井の一なり。昔鎮西八郎為朝伊豆大島より、我弓勢昔に変わらずやとて天照山をさして遠矢を射る。その矢18里を越えてこの井中に落ちたり、里人その矢を取上げるに鏃は井底に残る、今も井中を浚えばその鏃を見ると云う、ある時取出して明神に納ければ井水涵れたり又井中に投ずれば元の如く湧き出すという、鏃の長四五寸ばかりありと云う」：新編鎌倉志

15. 和賀江島（現存する日本最古の港湾施設）

材木座海岸飯島の沖合いに玉石を積んだ小さな島が水面上に顔を出している。この島が和賀江島と呼ばれている、現存しているわが国唯一の鎌倉時代の築港跡である。

吾妻鏡貞永元年（1232）7月12日の条に、「今日勸進聖人往阿弥陀仏（寛喜3年4月に九州筑前新宮浜の鐘ヶ崎に防波堤を構築した。）が申請につきて、舟船著岸の煩いなからんがために、和賀江島を築くべきの由と云々、武州（北条泰時）は特に御歡喜ありて合力せしめたもう、諸人また助成すと云々。」

同じく7月15日の条に、「今日、和賀江島を築き始む。平三郎左衛門尉盛綱行き向かうと云々。」とのべている。

同年 8 月 9 日の条に「和賀江島その功を終ふ。よって尾藤左近入道・平三郎左衛門尉・諏方兵衛尉御使として巡検す云々。」との事から、和賀江島の築堤工事は 7 月 15 日に着工し、8 月 9 日に完成したことになる。

この記録から工期は 26 日と考えられるが、あまりにも短期間にて完成している。玉石の大きさ、これらを相模川、酒匂川、伊豆海岸などから運ばれたと言われていることから舟による運搬及び工事規模みて、また当時の土木技術の水準、舟の大きさから考えてみるにこの工期はいささか疑問視するところである。

中世の紀行文「東関紀行」(作者不明、仁治 3 年(1242)8 月に京を出発し、18 日余りの後に鎌倉に到着し、約 2 ヶ月ほど滞在して鎌倉をあとにする。)

同じく「海道記」(作者不明、貞応 2 年(1223)4 月 4 日の朝に京を出発し、18 日に鎌倉に到着し、5 月始めに帰途につく。)の両書に当時の鎌倉の海に就いての描写が見られる。

東関紀行「かくしつ明かしくらすほどに、つれずれもなくさむやて、和歌江の築島、三浦の三崎などいう浦々を行きて見れば、海上の眺望、哀れをもようして、来し方に名高く面白き所々にもおとらず覚ゆ。」

海道記「申の斜めに、湯井の浜におちつきぬ。暫く休みて、この所をみれば、数百艘の舟、とも縄をくさりて、大津の浦に似たり。云々」と当時の鎌倉の海岸の賑わいが画かれている。

この時代の鎌倉は大陸との交通が盛んで、多くの僧が来日して「仏教も盛んとなった、又多くの陶磁器類も輸入されている、現在でも材木座の海岸にて当時の青磁の破片が発見されます。

以上